

保育実習Ⅱにおける学生の学びについての一考察

長谷 秀揮 *

A Study of A discussion of the students' learning in child care and education trainingⅡ

Hideki Hase

本稿の目的は、保育実習Ⅱにおける実習生の様々な学びや気づきに着目し、保育者としての課題、また問題点等を明らかにすることにより、保育実習指導Ⅱにおける事前及び事後指導のより良いあり方を探ることに資することであり、ひいては実習指導の内容と質の充実、すなわち保育実習指導Ⅱの授業の一層の充実と改善向上に繋げていくことである。具体的には、実習生に対する保育実習Ⅱに関する実習事後アンケート調査、並びに保育実習指導Ⅱの授業での事後指導における実習の振り返りシートを精査して、保育者としての学びや課題、問題点等を分類整理及び分析し、かつ考察を加えることであり、保育実習指導の充実向上に繋がるように今後の課題と展望を探ることである。

Key words: 保育実習Ⅱ、学び、課題、実習事後指導、振り返りシート

1. はじめに

保育者を目指す学生は、保育士資格にせよ幼稚園教諭免許にせよ、養成校（大学や短期大学、また専門学校等）において保育実習や教育実習に取り組む資格及び免許に必要な単位を修得することが求められている。保育実習の目的と位置づけについては、「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」（平成15年12月9日、厚生労働省 雇用均等・児童家庭局長通知）とされている。そして保育実習は保育の現場を借りて養成校が現場の保育者に教育を委託する形で行われ、学生が保育の実際を体験的に学ぶ機会であると位置づけられている。

厚生労働省が、全国保育士養成協議会に委託する形で実施している保育士の資格試験については試験科目に実技科目があり、筆記試験のみではない内容となっている。しかし保育実習に関しては保育実習理論として筆記試験科目となっていて、現状では資格取得の要件として保育現場での保育

実習は義務づけられてはいない。しかし保育所保育指針において保育士は、「倫理観に裏付けられた専門的知識技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである。」¹⁾とされ、保育の専門家として位置づけられているところからみても、保育者としての専門性を担保するためには保育実習つまり、保育の現場において実際の保育の様子を見て聞いて、そして例え部分的であるとしても自らが実際に乳幼児を保育することによって、子ども理解と保育者の職務についての理解を深め、実際の保育に対する認識を深めることは保育者を目指す学生にとっては、とても有意義であり、かつ必要不可欠な経験であるといえる。

「聞いたことは忘れ、見たものは覚え、体験したことは忘れない」という中国の諺があるが、筆者自身も学生時代の保育実習経験を、かれこれ30数年経た今でも断片的にはあるが覚えていて、保育所（園）で実習生として保育を初めて体験した感動と喜びと多くの反省点は、その後の保育士としての原点になった事を振り返ることができる。

保育実習生は、誰もが大きなり小なりの期待と不安を抱いて実習に参加するが、保育実習Ⅱ（保育所）は本学においては学生にとって最後の保育実習と

* 四條畷学園短期大学 保育学科

なることもあり、個人差はあっても学生の期待と不安は小さくない。それゆえ保育実習指導Ⅱにおいては1年次生での保育実習指導Ⅰと同様に、学生に対して全体として、また同時に一人ひとり個別に色々な配慮をしたり細々と注意を払ったりして、事前及び事後指導に最善を尽くしている。時間的な制約等の要因により、ある意味見切り発車の状態では保育現場に送り出している現状があることも否めないが、本学における保育実習Ⅱの履修者は、ほとんどの学生が勉学もよく進み、かつ施設実習や教育実習の経験を積んでいる2年次生なので、初めての实習に臨むことになる1年次の保育実習Ⅰほどの緊張感やハラハラした様相は皆無といえる。

筆者は、保育実習Ⅰ及びⅡ、並びに保育実習指導Ⅰ及びⅡの保育所実習担当であり、そして自らの長い保育現場での実践経験を生かすべく、可能な限り現場に即した実際的な指導をと考え、授業内容について保育所（園）での実際の保育の様子やエピソード、失敗談や苦労話等を織り交ぜながら具体的に理解し易く、かつ実践的なものになるように心を砕き工夫し配慮しているが、さらに充実した実習指導の授業を学生に提供することができればと切に考え、日々試行錯誤を繰り返しているところである。

そして同じ社会に共に生きる身近な大人として、幼い子どもたちの気持ちや心の動きに寄り添いながら共に生活し、共感しつつ支え励まし、かつその中で人としてのあるべき方向性を示してそっと背中を押して促すことができるような保育者、そしてまた同時に子どもたちから全面的に信頼され、とにかく無条件で好きだけど、傍らで接しているとピリッと背筋が伸びる、さらに例えるならばそれぞれの子どもにとって“好きだけど、なんとなくコワイ存在である身近な大人”である保育者を保育学生には目指して欲しいと考える。そのような素晴らしい保育者になる為の階段を、学生が一步一步上っていく、そのためのスペシャルエクササイズとしての保育実習Ⅱであり保育実習指導Ⅱとなるように心から願うものである。

2. 研究の目的

保育実習Ⅱ（保育所実習）に参加した保育学生の学びや気づきに着目し、実習後に実施した事後

アンケート及び、保育実習指導Ⅱの授業において各自が作成した設定保育（指導実習）の振り返りシートの記述を分析及び、考察し、実習生が実習を振り返って保育者として必要であると捉えた自分自身の今後の課題や問題意識を明らかにすることにより、保育実習指導Ⅱの授業と保育実習Ⅱを含めた実習生に対する指導と援助の内容の一層の充実、改善向上に繋げていくことを研究の目的とした。

3. 研究の方法

対象：保育実習Ⅱ（保育所）の参加者 82 名

実習時期：平成 25 年 12 月

研究の概要：保育実習Ⅱの終了後の実習事後アンケート及び、設定保育（指導実習）の振り返りシートの記述を整理及び分析し、記述については KJ 法を用いて整理分類して、カテゴリー化及び統合し考察を加えた。

4. 結果と考察

[1] 『実習事後アンケート』について

(1) 保育実習Ⅱで改めて認識した自分自身の課題

保育実習Ⅱに参加した学生が実習事後指導の中で作成した事後アンケート（82名の学生が作成：回収率100%）における、保育者を目指して参加経験した保育実習Ⅱを通して改めて認識した自分自身の今後の課題についての記述をカテゴリー化し整理分析すると次のような結果になった。

(2) 大項目と記述数 [総合計 82] (=複数記入の記述含む) について

I 「保育の理論と技術」 [計 66]

II 「保育や実習に対する姿勢や構え」 [計 5]

III 「その他」 [計 2]

IV 「課題は特になし」 [計 9]

(3) 小項目と記述数

I 「保育の理論と技術」 [合計 66] に関して

①保育理論 [計 14]

○子ども理解や発達段階の理解 [7]

○障害児保育について [4]

○年齢に合った指導案、日誌の書き方 [2]

○食物アレルギーの子どもへの配慮 [1]

②保育技術 [計 47]

○子どもとの関わり方 [17]

○子どもへの言葉かけ、声掛け [10]

- 手遊び [8]
- ピアノ [7]
- 絵本の読み聞かせ [2]
- 障害児の関わり方 [2]
- その他 折り紙 [1]
- ③保護者との関わり、連携 [計 3]
- ④その他 [計 2]
- II「保育や実習に対する姿勢や構え」に関して [計 5]
- ①保育に対する姿勢や構え [計 2]
 - 積極的に物事に取り組む [1]
 - 機敏に動く [1]
- ②実習に対する姿勢や構え [計 3]
 - 積極的に行動する [1]
 - 視界を広くする [1]
 - 要領よく動く [1]
- IIIその他 [計 2]
 - 子どものことを第1に考えられる保育をする [1]
 - 子どもたちが生活しやすい環境作り [1]
- IV「課題は特になし」 [計 9]

[2]『実習事後アンケート』についての考察

保育実習Ⅱで改めて認識した自分自身の課題についての82名の実習生の記述は、やはり保育の理論及び技術に関して自らの課題としてとらえている学生が全体の約57% (47/82) と、過半数を超えて圧倒的に多かった。その中でも、「○子どもとの関わり方」と、「○子どもへの言葉かけ、声掛け」の両方で保育技術において約57% (27/47) を占める結果となった。

これについては、子どもとの日常的な関わりがない学生にとっては、いたしかたないことであるといえるが子どもと密接に関わろうとすればするほど、関わる際にどのように関わればよいのか、また具体的にどのような言葉をかければよいのか、といった点についてよく分からず、難しい課題であると学生は認識しているといえる。子どもとの関わり方の経験の少なさ、またその希薄さが主な要因と考えられ、一人ひとりの子どもの状況に応じた関わり方や言葉かけについては、実際の子どもの触れ合いや、保育の経験の多寡に応じて、その的確さや子どもの気持ちに寄り添える度合いが変わってくると考えられる。

つまり子どもへの関わり方と言葉かけについて

はある程度の子どもの触れ合いの経験が必要不可欠で、いくなれば一定のレベルまでの経験の量的な蓄積のあることが前提条件になり、個人差はあるがその蓄積が一定量を満たしたその結果、子どもとの関わり方や言葉かけが比較的スムーズにできるようになり、さらには子どもとの関わり方や言葉かけの内容と質にも少なからず影響するといえるのではないだろうか。

また、「手遊び」と「ピアノ」は、保育実習Ⅰの事後アンケートにおける実習生の振り返りにおいても多くの学生が課題として挙げている²⁾が、この二つの保育技術は保育実習における、さらには実際の保育においても同じく基本中の基本の保育技術といえる。そしてまた、子どもとの関わりにおいても園生活の多くの場面で両者は必須のスキルであり、保育者のその技術のレベルの高さ及び、引出しの多さ並びにバラエティーの豊かさが、子どもとの関わり方のスムーズさや幅の広さに、ひいては保育そのもののスムーズさや、保育の奥行きの高さにもつながると考えられる。

したがって保育実習Ⅱを終えて、その点について自分自身の課題であると考えた多くの学生(過半数:57%)は、見方を変えると実習を通して保育実践における本質的な要素の一つ、いわばキーファクターに迫ることができ、その重要性をとらえることができるようになったといえるのではないかと、換言すれば保育実践の最も肝心の要諦の一つを、保育の現場において自分自身の実感としてとらえることができたと考えられる。

このことは保育理論に関して「○子ども理解や発達段階の理解」[7]の他に、より専門的かつ具体的な「○障害児保育について」[4]や、「○食物アレルギーの子どもへの配慮」[1]についても問題意識を持った学生がいることも同様に鑑みると、保育に関しての学習と経験が進み深まった2年次生ならではの課題であり学びであるといえる。

反面、「保育や実習に対する姿勢や構え」についての記述数は、[5]と少なくなっていて、昨年実施した1年次生の9月に参加した保育実習Ⅰの事後アンケート調査の結果と比較すると、格段に全体に対する割合が低くなり(約7%)その差異が顕著でこれも2年次生ならではの、驚かされる結果となった。

また、「課題は特になし」と答えた学生の記述が

[9]あり、そのように記述した実習生の多くについて、自信過剰とまではいえないまでも、保育そのものや子ども理解について、そして保育者の在り方、また保育者の専門性や保育技術や理論等について認識不足であったり、とらえ方が浅かったりと、いったような印象を受ける。該当の学生に対して個別にヒヤリングを実施するなどして、詳細に記述内容の意図や考え、記述の背景や経緯等も含めて、把握し問題の所在を明らかにする必要性があると考え。

[3]『設定保育（指導実習）の振り返りシート』 について

(1) 設定保育（指導実習）での学び等について
保育実習Ⅱにおける実習生の最大のミッションということができ、学生が実習全体の中で一番力を入れエネルギーを注ぐ設定保育、すなわち指導実習について、実習後の事後指導の一環として振り返りシートを実習指導の授業で学生に作成させた。(80名の学生が作成：82名の実習生中2名が諸般の事情により設定保育を実施せず) その中で保育所(園)において実習中に実施した設定保育(指導実習)の経験を通して得た、学びや問題意識等についての記述を整理分析し、カテゴリー化すると次のような結果になった。

(2) 大項目と記述数 [総合計 82] (=複数記入の記述含む) について

- I 「保育の要点や留意点等について」 [計 44]
- II 「保育の技術について」 [計 24]
- III 「子ども理解について」 [計 6]
- IV 「実習や設定保育に対する姿勢や構え」 に関して [計 7]
- V 「その他」 [計 1]

(3) 小項目と記述数について

- I 「保育の要点や留意点等について」 [合計 44] に関して

- ①保育の展開、遊びの進め方の要点や留意点などについての学び：主として保育者側 [計 36]
 - 導入、展開、まとめ、の流れが大切 [13]
 - 臨機応変に対応することの大切さ [7]
 - 計画や事前準備 [5]
 - 時間配分や保育者同士の連携など、その他の保育の展開、遊びの進め方の要点や留意点など [各 1：11]

- ②保育の展開、遊びの進め方の要点や留意点などについての学び：主として子どもに関して

[計 7]

- 子どもの活動を予想予測すること [4]
- 視野を広くして子ども全体をみること [2]
- 子どもの個人差に留意する [1]

- ③その他 [計 1]

- 子どもたちをまとめることの大切さ [1]

- II 保育の技術 [計 24] に関して

- 子どもへの説明や声掛け、言葉かけ [13]
- 絵本の読み聞かせ [6]
- 身近にあるものを活用する [2]
- ピアノ [1]
- その他 [2] (自然の中での遊び方、など)

- III 「子ども理解について」 [計 6] に関して

- 年齢や月齢による差異 [3]
- 配慮の必要な子どもへの対応 [1]
- その他 [2] (クラスの雰囲気把握、理解について、他)

- IV 「保育や実習に対する姿勢や構え」 [計 7] に関して

- 子どもたちと一緒に自分自身も楽しむ [3]
- 時間に余裕を持つ [1]
- マナーや実習態度がとても大切 [1]
- 自分で考えて行動する [1]
- リラックスする [1]

- V その他 [計 1]

- 子どもの作品への共感の大切さ [1]

[4]『設定保育（指導実習）の振り返りシート』 についての考察

設定保育とは、保育所(園)における保育を養護と教育の2つの側面からとらえるならば、主に教育の側面の活動であり日常の保育の中では通常、午前中に行われ、一日の保育の中心となる教育的活動であるといえる。そして実際の保育においては、設定保育は当然のことながら、子どもの興味関心にもとづいた自発的な遊びを通しての総合的な活動として展開されることになるが、その遊びを“設定”することから設定保育と呼ばれているのである。

実習生は、その設定保育を保育実習において経験することが求められているが、とりわけ保育実習Ⅱにおいては一人の保育者として責任を持って、

その日の保育の中心活動を設定し展開すること、並びに必要に応じて子どもを援助し指導することが求められるので、当日はもちろん、数日前の設定保育案（指導案）の作成、準備の段階から実習生にとって全く気の抜けない取り組みとなる。

実際には該当クラスの担任である指導保育士の助言指導を事前に十分に、そして保育中も適宜あおぎながら行うので、当然ながら子どもたちの発達段階やクラスの保育の流れを踏まえ、かつそれらに沿ったものとなるが、実習生がこれまでに身につけた保育に関する知識、技術、能力等々の各自が持てる保育力の全てをフル活用することが必要となるので、実習生にとっては保育実習におけるいわば最大の関門となり、必然的に大変大きなエネルギーを注ぐことになるが、反面そこから得るもの、学びとることも非常に多いものとなる。

そのような設定保育（指導実習）の経験を通して得た学びや問題意識等についての実習生の振り返りシートの記述は、予想通り「保育の要点や留意点等について」の記述数が多く、合計で[44]あり、全体の約54%となり、半数以上の学生がその点についての学びを得るか、もしくは問題意識を今回の実習において認識していることがわかった。また、「保育の技術について」は、合計記述数が[24]となり、これは全体の約29%であり、ほぼ3割の学生が保育技術に関しての学びを実習の成果としていることがわかった。したがって、この二つの項目を合計すると約83%となり、実に8割以上の学生が、保育の要点や留意点、もしくは保育技術についての学びを実習中の設定保育の取り組みを通して得たものとしていることがわかった。

また、「子ども理解について」については、合計[6]の記述であったが、子どもの年齢による成長発達の差異や、特に乳児クラス、なかでもとりわけ0歳児クラスにおける月齢による差異についての学びや認識についての記述がこの項目全体の半数の[3]となった。このことに関しては「乳児保育」や「保育内容 健康」、そして「発達心理学」などの科目で、理論としての学習は授業でも進んでいるが、実習で乳児クラスに入り、実際の乳児の子どもたちに接し関わったうえでの五感を通じての明確で鮮やかな、実感を伴った生きた学びにつながっているといえる。

「実習や設定保育に対する姿勢や構え」に関して

は合計[7]の記述数となり、1年次生に実施した保育実習事後アンケート調査の結果と比較すると、全体に対する割合がかなり低くなり（約9%）その違いが顕著で、実習事後アンケート（保育実習Ⅱ）と全く同じ傾向の結果となった。具体的な記述内容では、「○子どもたちと一緒に自分自身も楽しむ」ことについての学びに関する記述が[3]あり、設定保育に取り組む中で緊張したり、プレッシャーを感じたり、等々の精神的な重圧を感じる中での記述であるので、実習生のリアルで率直な学びであり認識である、ということができよう。

5. 今後の課題と展望

今回の保育実習Ⅱの実習事後アンケート及び、設定保育（指導実習）の振り返りシートの分析及び考察から、保育技術に関しては1年次生の入学当初よりそれぞれの授業において、手遊びや絵本の読み聞かせ、またピアノなどの実技練習や実演、またレッスンを少しずつ積み重ねているので、保育実習Ⅱの参加時期である2年次の12月においては、基本的なスキルは学生は十分に習得していると考えられるが、手遊び、歌遊び、絵本の読み聞かせ、エプロンシアター、ペープサートなどの実践的な内容を一層盛り込んだ、またよりテクニカルで専門的な色彩の濃い保育実習指導Ⅱの授業としていく必要があるといえる。

その中でも手遊びを課題としてとらえている学生が比較的多くいたので、子どもとのかかわりの中での実践的な活用や設定保育への応用などの、より高度で発展的な活用法やテクニックについても、保育実習指導Ⅱの中で取り組む必要があるように考えられる。また同様にピアノについても音楽担当教員との連携を一層密にして、実習に活かせる曲目の習得にさらに力を注いでいただけるようにするなど、各々の学生のニーズに出来る限り応えられるようにしていきたいと考える。

そして「子どもとの関わり方」と、「子どもへの言葉かけ、声掛け」については、子どもとの日常的な関わりがなく、その経験の少なさ、希薄さが学生にとって、こと保育実習に関しては大きなウィークポイントになると考えられるので、実習指導の授業において、子どもの気持ちの読み取りや子どもや保育の状況に応じた子どもへの言葉かけや、声掛けについてのトレーニングを、ロールプ

レイや部分的な模擬保育等といった手法やエクササイズを活用するなど授業内容に加えて、これまでの取り組みをさらにレベルアップしてきたいと考える。

また、設定保育（指導実習）は、実習全体の成否を大きく左右するといって過言ではなく、実習の評価に直結する非常に大切な取り組みになるので、事前指導における設定保育の指導の比重を増やして、年齢に応じた指導案のより多くの例示と解説をはじめ、導入⇒展開⇒まとめ、といった設定保育の流れについて、またそれぞれの場面での実習生の具体的な動きや言葉がけについて、具体的に実践的な要点、要領の解説をより一層充実していくことを、保育実習指導Ⅱの授業における今後の課題及び改善向上の大きなポイントとしたいと考える。

そして、「臨機応変に対応することの大切さ」についても、パワーポイントやビデオやDVDの映像を活用するなどして、実際の保育における子ども同士のトラブルやけんかの場面等でのトラブルシューティングやイメージトレーニングを可能な範囲で実施して実習生のニーズに対応できるようにしたいと考えている。

試行錯誤の繰り返しの先に見えてくるものがあると、よくいわれるが、学生にとっては保育実習も大いなる試行錯誤であるにとらえることができる。その中において実習生は保育者としての自分をしっかりと見つめ、同時に子どもと保護者、そして保育者を自分との関係性の中で見つめることになる。そのように学生にとってのいわば絶好の自己覚知の機会でもある実習を担当する教員の側においても、教え指導する側の試行錯誤を不断に重ねていくことが求められるといえよう。

学生の学びや気づきに寄り添いながら実習担当教員として試行錯誤を積み重ねていき、かつ実習指導の質はすなわち教員の質の問題でもあらえて、実習指導の改善向上とさらなる充実にむけての取り組みをたゆまずに続けていきたいと考える。

今回、実習生の様々な学びや気づきに着目し、保育者としての課題や問題点をクローズアップするなかで、教授学習関係における教員の側の情熱と学生の側のモチベーションの重要性、及び両者の基本的な信頼関係の必要性、そして授業並び

に課外等の種々の場面における、学生つまり保育実習生と実習指導担当教員の相互の双方向的関係性の確立と活用、またその充実の大切さなどが改めてみえてきた。今後の研究課題として取り組んでいきたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省 編「保育所保育指針解説書」フレーベル館 2008 82 頁
- 2) 長谷秀揮 著「保育実習における学生の学びについての一考察」日本保育学会第 66 回大会発表要旨集 2013 818 頁

参考文献

- 1) 玉井美和子監修 高玉和子・浅見 均 編著「資格取得に対応した保育実習」学事出版 2002
- 2) 大橋喜美子 編著「はじめての保育・教育実習」朱鷺書房 2003
- 3) 民秋 言・安藤和彦・米谷光弘・中西利恵 編著「保育所実習」北大路書房 2009
- 4) 日吉佳代子・若山 剛 編著「保育所実習」樹村房 2005
- 5) 全国保育士養成協議会 編「保育実習指導のミニマムスタンダード」北大路書房 2007
- 6) 坂根美紀子・佐藤哲也 編著「保育実習の展開」ミネルヴァ書房 2009
- 7) 新保育士養成講座編纂委員会 編「保育実習－新保育士養成講座 第 9 巻－」全国社会福祉協議会 2011
- 8) 腰山 豊 著「保育実践力を高める」春風社 2006
- 9) 網野武博・武藤 隆・増田まゆみ・柏女霊峰 著「これからの保育者にもとめられること」ひかりのくに 2006
- 10) 小田 豊・笠間浩幸・柏原栄子 編著「保育者論」北大路書房 2009
- 11) 汐見稔幸・大豆生田啓友 編「保育者論」ミネルヴァ書房 2010

－ 2014. 3. 10 受稿、2014. 3. 10 受理－

A Study of A discussion of the students' learning in child care and education training II

Hideki Hase

Shijonawate Gakuen Junior College

The learning that the trainee in child care and education training II varies as for the purpose of this report pay its attention to notice, and is to contribute to investigating the better way of the prior and subsequent instruction in child care and education training instruction II by clarifying problems, and the problem as a nursery teacher is to connect it with contents of the training instruction and more enhancement and improvement improvement of the class of enhancement of the quality namely child care and education training instruction II in its turn again. Specifically, after true taking lessons about child care and education training II for the trainee of the training in the subsequent instruction by questionnaire survey and the class of child care and education training instruction II look back, and investigate a seat thoroughly, and is classification rearranging and analyze it and to add consideration by learning and the problem as a nursery teacher, problems, and is to investigate the future problem and prospects to be connected for enhancement improvement of the child care and education training instruction.

Key words: child care and education training II, Learn , instruct it after a problem, true taking lessons, look back a seat